

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

丹羽 朋子

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科

【研究題目】

中国剪紙の「民間芸術」化
: 農村女性と知識人芸術家の共生的造形実践を介した自己再編のプロセス

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、中国の「民間芸術」に関する事例研究を通じ、芸術研究の新たな方向性を示すものである。制作・鑑賞の現場で生起する人-モノ-環境の相互作用を通じた(不意打ちの)感性的経験の次元を捉えてこそ、人間の生の営みとしての「芸術」の考察が可能となる。このような問題関心から、本研究は次の二点を目的に据え、事例研究に取り組む。

【1】「芸術」、特に造形実践(描く・作る/展示する)が、人々の個別具体的な「生の経験」として生成する局面を描き出す。さらにその経年的な経験を通して、人々が自己を再編していくプロセスに焦点をあてる。

【2】【1】の手立てとして、質的調査や民族誌的記述を通じて人類学が蓄積してきた知見(特に物質文化研究や視覚人類学等)を再検討して、実際の調査・分析で検証し、芸術の人類学及び芸術研究の新たな方法論を提起する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

事例には、中国・陝北地域(陝西省北部)の剪紙(切り紙細工)をめぐるとの営みを取り上げる。剪紙の切り手は農村女性であり、現在は省級の非物質文化遺産の指定も受ける。この技芸は抗日戦争以降、国家の指導の下で「民間芸術」化され、発展を遂げた。だが、国や都市の知識人による「芸術」としての高い評価や象徴的意味づけに反して、現地における剪紙は依然、使い捨ての室内装飾品に過ぎない。ではなぜ、物質・価値ともに儂いモノ=剪紙は、文革期の禁止や生活習慣の変容といった危機を乗り越え、今もなお当地の暮らしを彩る女の手仕事であり続けているのか。

本研究はこの問いを端緒として、「紙をある形に切って貼る」という、固有の場所での身体を投じた制作・展示の実践を通して、切り手たちが自己や他者と交換や差異化を繰り返してきた経験、特に切り手女性たちと、建国期以降、剪紙の「民間芸術」化に寄与した男性芸術家たちとの相互交流に焦点をあて、考察を行った。民族誌的調査を通じて、彼/彼女らが「民間芸術」をめぐり、陝北農村という場所でいかにして共に生を営み、相互交渉してきたか——その「共生的な芸術実践」の生成過程を、制作をめぐるとの感性的な経験の次元を射程に入れつつ、調査・分析を試みた。

研究方法としては、陝北地域の現地調査を実施し、1930-40年代の新中国建国期に陝北に集って剪紙を「発見」し、プロパガンダ作品に流用した芸術家たちの農村体験、また文革後「民間芸術」復興の機運が高まった80-90年代、根源を求めて当地を訪れた都市の美術家たちが行った農村調査と剪紙指導の取組みについて、文献調査や芸術家への聞き取り調査などを行った。さらに陝北出身の一人の版画家の民間芸術の指導や制作について、制作過程の観察や、絵日記的な記録などの分析を行った。さらに、芸術家側の調査で収集した視覚的データを媒介に、彼らと交流した農村女性側の方にも映像インタビュー(video-elicitation interview)等を行い、芸術家-農民双方の視点から「民間芸術」がいかにして生成し、それぞれの自己の再編に関係してきたのか、考察を試みた。

【結論・考察】（４００字程度）

「民間芸術」を流用した中国のプロパガンダ芸術の表象分析等の既往研究の多くは、「政治（男・文字記録）が民間芸術（女・非識字者）を採集、流用して指導する」という権力構造批判に力点を置く。だが人々が個別に経験する現実には、それほど単線的ではない。陝北農村は今も「声の文化」(orality)が色濃く残る地域であり、剪紙は、(作品内容の記号的解釈を超えて)音や紙、かたちそれ自体として現前する「モノ」として、窑洞と呼ばれる伝統穴居や黄土高原の風土と関係を結びつつ営まれる暮らしのなかで、多様な象徴的意味を生む装置として機能する。また切り手女性にとっては、対象を捉える観察眼や陰陽といった世界の見方と技術をもって剪紙のかたちを生み出す、その時間こそが一つの愉みや自己の発露を意味する。他方、剪紙の発展に指導者として寄与してきた男性芸術家たちは、切り手女性との制作現場での交流を通して、彼女たちの視角や表現方法を相互学習し、自身の芸術実践に取り入れることで、むしろ「農民」「民間」「芸術」といった既存の枠組を自ら再編してきた。本研究では、剪紙という「民間芸術」が、「描く」「歌う」といった、表象や言説に回収し得ない、身体や固有の場所とのインタラクションを通じた経験の共有を通じて、その都度創られ、改編されてきた過程を具体的に明らかにした。今後はこの研究成果をふまえて、さらに被調査者と共同で映像作品や展覧会を制作することを通して、人類学的実践をより広く共有、検証する計画である。